

聖書：コリント人への手紙第一 1：1～3

説教題：コリントにある神の教会

日時：2021年12月26日（朝拝）

今日からコリント人への手紙第一を開きたいと思います。私は講解説教としては、これまでこの書を敬遠して来ました。主な理由は語るのが難しそうだからです。この書では色々なテーマが扱われます。コリント教会に生じていた現実の諸問題に対してパウロが福音の真理を適用します。しかしそのテーマが議論を呼びそうなものばかりです。特に7章以降ではコリント教会からの質問に答えて様々なことについてパウロは述べます。7章では結婚、離婚、再婚、独身について。8～10章では偶像にささげた肉を食べて良いのか悪いのか。11章では礼拝における女性のかぶり物について。13～14章では聖霊の賜物、特に異言に関して。15章は復活について、そして16章は結びとなっています。このようにこれらの中の一つのテーマだけでも聖書全体を視野に入れながら話すことは相当なエネルギーを要すると思われるのに、それが次々に現れるのです。一つが終わったと思ったら、すぐ次の大きな山が待っています。しかも実践的な内容ですので結論がどうなのかをはっきりさせなくてはなりません。当時の時代状況を考慮に入れつつ、現代に適用しなければなりません。これでは途中で息切れしてしまうのではないかと恐れたわけですが、それで後回しにして来たわけですが、新約聖書で説教していない箇所が少なくなって来ましたので、いよいよ取り掛からなければならぬかとしばらく前から覚悟していました。それにコリント書は結構な分量で、これを避けたままでは聖書全体の理解に偏りが生じると思っていたこともあります。神にお委ねしつつ、しかし新しい導きをいただくのを楽しみにして、この書に挑戦して見ることにした次第です。

さてコリントという町を思い浮かべてまず特徴的なことは、その地理的な位置です。聖書地図を参照いただくと分かりますように、コリントはギリシャ本土とペロポネソス半島がつながる付け根の部分にあります。ここに人が多く集まるであろうことは容易に想像できます。西側のアドリア海から東側のエーゲ海に至るには、半島の南端をぐるっと回るよりはるかに近道ですし、安全です。ですからここは東西の海路の接続点となります。またここはギリシャ本土とペロポネソス半島を陸路で結ぶ縦の線の接続点でもあります。こうして東西南北あらゆる方向からの往来が一点に集中する交通の要衝となります。当然経済的に繁栄し、多くの人々が集まります。パウロは第2回

世界伝道旅行でこのコリントにやって来ました。初めは一人寂しく、弱々しい状態が入って来ましたが、主の導きを得て結果的に1年半腰を据えて伝道し、コリント教会を設立します。そして一旦エルサレムに戻った後、第3回世界伝道旅行でエペソで2年強、伝道した際、——このエペソはエーゲ海を挟んでコリントの対岸にあります——そこから書き送ったのがこのコリント人への手紙第一でした（16章8節参照）。

しかしこの手紙を見て行くと、5章9節から、実はこれより前にパウロがコリント教会に別の手紙を書いていたことが分かります。それは新約聖書に収められておらず、今日の私たちは読むことができません。5章9節：「私は前の手紙で、淫らな行いをする者たちと付き合わないようにと書きました。」このコリントは不道徳で有名な町でした。アクロコリントスと呼ばれる町を見下ろす小高い丘の上には女神アフロディテの神殿があり、そこには1000人の神殿娼婦がいたようです。そういう風紀の乱れた町の雰囲気がこの教会にも影響していたようです。それで第一の手紙を書きましたが、あまり功を奏さなかったようです。そこでこの2つ目の手紙となります。きっかけは二つです。一つはこの後1章11節に記されますように、パウロはクロエの家の者からコリント教会の中に争いや分派があると聞きます。もう一つは先に触れましたように、コリント教会からコリント教会で生じている問題について助言を求める手紙がパウロのもとに届いたことです。このように教会が成長する過程で生じた様々な諸問題に福音はどう適用されるのか、そのことを具体的に記した実践神学の書がこの書です。私たちはこの書を通してこれらについて具体的な教えを受けることができます。

さて今日の1節2節3節は当時の手紙と共通のスタイルで、それぞれ差出人、宛先、最初の挨拶という順序で記されます。まず手紙の差出人はパウロです。彼は自分のことを「キリスト・イエスの使徒として召されたパウロ」と言っています。この後1章10節以降の本論でさっそく、コリント教会で生じていた分派の問題が扱われます。12節に出て来るように、人々はそれぞれ「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言っていました。つまりパウロを評価せず、彼の権威に疑問を持つ人々も多数いたようです。その彼らにパウロは自らが使徒であることをまず強調しているのだと良く言われます。しかし彼は決して自分に注目させ、自分を高く持ち上げようとしたわけではありません。むしろ彼はこの書でキリストを高く上げ、その方を指し示そうとします。彼がここで「キリスト・イエスの使徒として召された」

と言う時、あのダマスコ途上における劇的な回心と召命のことを思い出していたのでしょう。また彼はここで「神のみこころにより」と言っています。つまり自分の意志で使徒になったのではない。自分から求めて使徒になったわけではない。神のご計画と導きにより、使徒として召された。そのパウロは自分を指し示すのではなく、キリストを指し示すことに徹します。そこにキリストの使徒として忠実にその召命に答えるパウロの姿を私たちは見るべきですし、その彼の言葉にキリストご自身のメッセージを聞いて行くべきです。

差出人としてもう一人名が記されているのはソステネです。彼は「兄弟ソステネ」とだけ言われています。これは誰でしょうか。詳しいことが何も言われていないということは宛先のコリント教会には良く知られた人だったことが伺えます。そしてコリント教会と関わりがあるソステネと言え、思い当たるのは使徒の働き 18 章 17 節に出て来る会堂司のソステネです。パウロがコリントで宣教を開始した頃、会堂司のクリスポが信じてクリスチャンになったので、ソステネが後を継いで会堂司になったのかもしれませんが。その彼が後に信者となり、今やパウロとともにエペソにいたのかもしれませんが。ソステネという名は一般的な名前だったので断定はできませんが十分にあり得ることでしょう。コリント書の最後の方からパウロは誰かに筆記してもらっていたことが伺えますが、もしかするとこのソステネがその役割を果たしていたのかもしれませんが。

さて 2 節は宛先です。そこに「コリントにある神の教会」とあります。そしていくつかの言葉が付け加えられています。ここに今日の箇所を中心メッセージがあると思います。3 つのことは見て行きたいと思います。まず一つ目としてパウロはコリント教会のことを「神の教会」と言いました。この手紙より前に書いたテサロニケ人への手紙が 2 通ありますが、どちらの手紙でも冒頭では「テサロニケ人の教会へ」と言われています。ですから同じように書くなら、ここは「コリント人の教会へ」でも良かったはずですが。でもパウロはそうは書きませんでした。彼は「神の教会へ」と書きました。ここには彼の意図、メッセージがあったと考えられます。先に触れましたように、コリント教会には分派の問題がありました。それはここに集まっていた人々の背景と関係があったように思われます。コリントは人々が集まって来る港町、大商業都市でした。経済的に豊かで、ギリシャ世界の知識人が多く往来しました。そういう背景のもと、コリント教会のメンバーには自分たちの知恵や知識を誇るという傾向があ

ったようです。互いに自らの知恵や知識を巡って競い合い、その結果、私はアポロにつくとか、パウロにつくとか、ケファすなわちペテロにつくとか、キリストにつくなどと争っていた。そんな彼らにパウロはここで教会は「神の教会」だ！と言っているのです。教会は自分たちが自由にできる、自分たちの教会ではない。誰か党首を立てて、そのもとで集まり、比較し合うグループではない。ある特定のリーダー、有力者の教会ではない。それは神の教会です。神のもので、ですから否定的に言えば、教会を人間が私物化できるところのように考えてはならないということです。神以外、教会の主人になってはいけません。逆に肯定的に言うなら、教会は神に起源を持ち、神が育てておられ、神が支配しておられる神の教会であるということです。そのことを教会を考える時、まずしっかり受け止めるべきであるということです。

2つ目に注目すべきは「コリントにある」と言われていることです。これはコリントという町に現れ、存在している神の教会ということです。反対から言えば、神の教会はコリントにしかないわけではない。神の教会は全世界的なものです。このことはその後の部分でも強調されています。2節に「すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに」と書かれています。つまりパウロが言っているのは、コリント教会だけが教会ではないということです。コリント人たちは自分たちに自信を持ち、自分たちを誇っていました。自分たちは特別で、自分たちは自分たちだけで完結し、他の誰にも頼らなくてもやっていけると自負していました。しかしそうではない。コリント教会だけが特別なのではなく、コリント教会も全教会のつながりの中にある一つの部分です。公同の教会の一つの現れです。私たちは具体的には個々の教会で信仰生活を送りますので、その具体的な現場に多くの関心を注ぐのは当然ですし、良いことです。しかしいつも忘れてはならないことは、私たちはより大きな神の教会の一部であるということです。全体で一つです。ですから私たちは独善的になってはいけません。自分たちだけ傑出しているかのように、あるいは自分たちだけで成り立っているかのように考えてはなりません。私たちは大きな一つの「神の教会」のつながりの中に生かされている者たちです。

そして3つ目に注目したいのは、私たちはみな「キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された」者たちであるということです。コリント教会は問題の多い教会でした。初めてこの教会に来た人は、果たしてここは教会か？と思うほどだったかもしれません。しかしパウロはそんなコリント教会を「神の教会」と呼びま

した。そしてここで「聖なる者とされた人々」と言います。この「聖なる者とされた」という言葉の基本的な意味は「聖別された」ということです。「キリストにあって」とありますように、キリストと結ばれて、その罪を赦され、聖められ、神のものとして取り分けられた聖徒たちということです。またこの「聖なる者とされた」という言葉は原文では完了形で記されていますので、キリストと結ばれて以来ずっと、今もその状態にあるというニュアンスを持ちます。色々と問題の多いコリント教会ですが、キリストにあって取り分けられ、神のものとしてされた教会です。この視点からパウロはこの手紙を始めて行くのです。ですから私たちはどんな教会でも自分勝手に見下げるような態度を取ってはならないと戒められます。時々、他の教会を見て見下す発言をする人がいます。あの教会はどうしようもないと言い、それに比べて自分たちはまだましだと自己満足する。あるいは逆に自分が所属する教会の色々な点に不満を持ち、この教会には神がない、神の臨在がないなどと言い放って出て行く。しかしあのコリント教会さえ「神の教会」であり、キリストにあって聖められた聖徒たちだと言われています。私たちはこの神の視点を受け止め、この神の目で現実の教会を見るべきではないでしょうか。そしてそのことを思い巡らす時にもう一つのことも見えて来ます。それは神の恵みによって支えられているのはコリント教会だけではないということです。私たちも同じです。人のことを云々する前に自分こそ罪だらけ、欠けだらけ、問題だらけの人間です。なのにこうして今日も神の一方的な恵みによって神の教会として立たせていただいています。聖なる者たちとされています。これはただただキリストの尊い十字架と、その聖めの御業によることなのではないでしょうか。私たちはそのことを今朝、心から主に感謝すべきではないでしょうか。

そして私たちはそのことを知り、ただそこにとどまって良いのではありません。神へと取り分けられた者たちとして、神の性質を映し出す者へと変えられて行かなくてはなりません。「神の教会」と呼ばれる者たちらしい特性を示す者となって行かなくてはなりません。そのためにパウロはこの書で具体的な問題について語るのです。私たちも一つ一つ教えられて、私たちを養いきよめてくださる神のお取り計らいの中を歩む者たちとさせていただきたいと思います。

その歩みのために、最後3節で祈りが記されます。これは他のパウロの手紙にも見られるものです。当時は直訳すれば「喜びなさい」という意味のカイレインという挨拶が一般的でした。聖書の中にもヤコブ書1章1節や、エルサレム会議の通知文の冒

頭、使徒の働き 15 章 22 節にその言葉が出ています。いずれも「あいさつを送ります」と訳されています。このカイレインという言葉はパウロは「恵み」を意味する「カリス」にもじって「恵みがあるように」という挨拶の言葉としました。またその後ユダヤ人の間で使われていたシャロームという挨拶、「平和があなたにあるように」と挨拶をそのまま踏襲して、ギリシャ語で平和を意味するエイレーネという言葉をつけました。恵みをいただいて平和の祝福があるように！という祈りです。これは「私たちの父なる神と主イエス・キリストから」と言われています。神がキリストを通してこの祝福をくださるように！ということでしょう。この手紙で言われることに耳を傾け、それを実行することにおいて、常に恵みと平安を神とキリストに求めて取り組むように！ということでしょう。

以上、この手紙の冒頭でコリント教会は「神の教会」と呼ばれました。「コリントに現れている神の教会」と。同じく私たちの杉並教会も第一に「神の教会」です。大きな一つの神の教会の一つの部分としてこの場所に現れ出ているものです。私たちの間にももちろん多くの欠けがあり、問題があり、改善の必要などがあります。そんな私たちもただ神の恵みにより、キリストにある聖めをいただいて「神の教会」とされています。神は今日もご自身のもので私たちに憐れみ、慈しみ、養っていただきます。私たちはこの恵みの前に恐れつつ、「神の教会」とされていることを心から喜び、感謝し、御名を賛美したいと思います。そしてこの恵みにあずかっている者たちとして、パウロがこれからキリストの使徒として語ってくれることばに聞いて、みこころに沿って歩み、成長し、神に栄光を帰す「神の教会」の栄えある歩みへ導かれて行きたいと思えます。